



弁護士として幅広い問題にかかわりながら 在日として今の日本でどう生きるかを問い続けたい。

プロフィール

1975年京都市生まれ。小・中学校は民族教育を受け、高校から日本の学校へ。中学校から陸上部に所属し、高校ではインターハイに出場。同志社大学経済学部在学中に弁護士をめざすことを決意。7度目の挑戦で司法試験に合格、司法修習を終えて昨年10月から大津市の吉原稔法律事務所勤務。

在日3世であるというご自分のルーツに気付かれたのはいつ頃のことですか。

物心ついた頃からです。両親からきちんと教えられていましたし、名前もずっと本名で、民族学校から一般の高校に入学した時も迷うことなく本名を使いました。両親のほうがいじめを心配して、通名にしたほうがいいのかはと云ったほどです。

そのことで辛い経験をされませんでしたか？

私の場合はありませんでした。本人の性格によるところが大きいように思います。後で知ったことですが、中学から日本の学校へ行った姉は、いじめを受けて辛い思いをしたそうです。

ルーツに対する意識は早くから持っておられたのですか。

小学生の頃から陸上をしていましたが、当時、試合というと京都市の大会までしか出られません。上位入賞しても国籍の問題で上の府大会に出場できず、その時初めて国籍による差別があるということに強く意識しました。

ルーツをどう教えるかは、各家庭の考え方によると思います。私の父は、若い頃北朝鮮を訪ねた時に国の体制に疑問をいだいたそう、私たちは幼い頃から日本で生きる道を選ぶよう言われてきました。しかし、それでもルーツは忘れないようにといつも父から言われます。

ただ、そもそもルーツというのはどういうものかは難しいテーマです。私自身は、親から子へ、またその子へ、過去を否定することなく受け継いでいく系譜であって、国籍はルーツではないと思います。

滋賀で暮らす外国籍の子どもたちの中には、日本ではルーツを隠したほうが暮らしやすいと考える子どもも多いようですが…

ルーツを出すことには勇気と強さが必要かもしれませんが、自分を隠して社会に受け入れられても最終的にははじめないし、それでは自分に自信が持てないはず。事実を事

実としてとらえないと、その先の正しい道は見つからないと思います。

弁護士をめざすことになったきっかけはどんなことですか。

日本で仕事をして生きていくためには、何か資格が必要だと考えていましたので、税理士の資格を取るつもりで経済学部へ進学しました。

私の中では、昔から在日のために何かしたいという思いがあって、中学に入学した時は陸上で活躍して民族学校の名を揚げたいと陸上部を作りました。高校、大学とずっと陸上を続けて、大学生の時に、将来自分に何ができるか真剣に考えた時に、税理士では関われない仕事の幅が狭いように思えてきたんです。

いろいろな人と話すうちに、弁護士ならより幅広い問題にかかわっていきえると思い受験を決意しました。弁護士の資格と経験は、何かをしたいと強く心を動かされた時に、それを実行できる力の源になるように思います。

ご両親は弁護士をめざすことについて何かおっしゃいましたか。

父からは「覚悟はできているのか」と聞かれました。一度、進んだら引き返せない道で、だめだったからと言って他の仕事はできない、大学卒業後すぐなら就職もしやすいけれど、時間が経てばやはり在日であることが不利になると言われました。それだけに、司法試験に合格した時、父は涙を流して喜んでくれました。

朴さんにとって、お父さんはどんな存在ですか。

優しいところもあって、家族をとっても大切にしてくれる父のことが好きですが、頑固で小さい頃はとにかく怖い父でした。

早い段階で母国の体制や思想に疑問をいだいたため、父は在日の中で少数派になり、それだけに自分がしっかりしないと家族にまで影響が出ると考えたようです。誰にどんなことを言われても揺るがない信念を持っていると思います。それがないと、自信を持って生きていくことができないということを教えられました。

今後、具体的に弁護士としてどのような活動をしたいと思っておられますか。

かつては経営者になりたいと思っていたので、企業関係を専門にする弁護士になりたいと思っていますが、非常に専門的な知識や経験が必要な分野です。今はとにかく知らないことが多すぎて毎日たいへんです。

在日の弁護士の方もたくさんおられて、そういう先輩と話してみると、「国籍は関係ない。在日でも日本人でも同じように対応すべきだし、国籍で仕事を選んではいけない。」と言われます。私も、国籍に促われず仕事に対してもっと厳格なスタンスで取り組んでいこうと思いました。

在日の方を取り巻く状況が変わってきたということがありますか。

1世、2世の方たちはたいへんな苦勞をして来られましたが、今は在日としてでも生きられる時代になってきて、ある意味過渡期ではないかと思っています。韓流ブームの影響も否定できませんが、それはあくまで表面的なもので、今の日本の社会の中で在日としてどう生きるかが問われています。

そういう意味で、民族学校の教育改革なども必要かもしれません。ただ、民族学校に行ったことで、韓国語の教育を受けられたことには感謝しています。最近、また韓国語の勉強を再開しましたが、母国語で会話することに、喜びを感じますし、その時は自分が韓国人だということを実感します。将来、韓国語でも依頼者の相談に対応できるようになりたいと思っています。

最後に滋賀県のみなさんにメッセージをお願いします。

今、滋賀県には在日も含めて、ブラジル人や中国人、そのほかたくさん外国人が暮らしています。自分と違う人間がまわりにいるということを、すばらしいことととらえてほしいですね。積極的に交流を図り、人権感覚を養ってほしいと思います。

一方で、外国人は自分から日本の社会へ入っていくという意識を持ってほしいですね。自分は自分としてしっかりした考えを持って入っていくと、後は個人対個人の付き合いになると思います。

とかく差別されているという被害者意識を持ちがちですが、違いを個性としてとらえられる強さと、外国人だということを言い訳にしないで、それを前向きな気持ちに変えるような生き方がこれからは必要ではないかと思っています。